

日本の歴史 30

『「ニッポン通」の眼：
異文化交流の四世紀』

ヘルベルト・プルチョウ著（淡交社 1999）

本書の請求記号 210.07Plu

稲垣 宏行

生前、カリフォルニア大学で日本学の教授だったスイス人の著者ヘルベルト・プルチョウ（1939-2010）は、安土桃山時代から昭和期までの海外の著名人たちが日本と日本人をどのように感じ捉えたかなどを記述しています。シーボルトやフェノロサなど、我々が名前をよく耳にする人物も含まれています。

本書に登場する人々は、著者に「日本学者」と呼ばれています。その中には明治期のイギリス人作家ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）のように日本に惹かれて帰化したいという思いを実現した人もいましたが、一方では日本文化について批判的な見方をする人もいたようです。例えば江戸時代、ヨーロッパの人々は日本に強い偏見を抱いていたと本書は指摘します。フランスの法学者モンテスキューは「（日本の）権力者は、国民を苦しめて、裁判や厳しい罰を受けさせるばかりで、日本人ほど残酷な民族はこの世にいない」と言ったそうです。本書が紹介する人物の一人、明治期のアメリカ人天文学者パーシヴァル・ローエルも西洋の見地から、日本人は非個性的で、日本文化は西洋から見て正反対だと考えていました。ただし「西洋の基準も、日本の基準も、互いの理解にはならない」とも言っており、著者は彼が完全に日本に対して批判的ではないと述べています。

ハーンら日本に好意的な人物が日本に強く惹かれた理由として、浮世絵などに象徴される日本文化の珍しさや日本人の素朴さ、つつましさといった民族的な美点が本書で挙げられています。一概にそうとは言えない部分もあります。日本を愛した明治期のポルトガル人ヴェンセスラウ・デ・モラエスは、日本人妻との生活でトラブルも経験しましたが、日本に骨を埋めたいと遺言しました。

ただ、そこには純粹に日本に惹かれただけでなく、王室の崩壊に見られる祖国の衰退に対する絶望もあったようです。

一方、日本を批判する理由としては、前述のローエルらのように、自国の文化や宗教に基づく偏見に左右されることもあれば、日本で起きたキリシタン弾圧や鎖国政策、幕末の攘夷運動など外的要因によるものもあります。本書の登場人物の一人で、幕末期に函館も訪れたフランス人宣教師メルメ・ド・カシヨンのように、宗教の違いから僧侶と衝突し、それが元で日本に不信を感じたという例もあります。逆に、ハーンが日本文化への愛着から西欧文化にかぶれる日本人を批判したという事例も存在します。

本書には日本を直接訪れたことがない人も登場しますが、偏見に囚われず客観的な見方をしてる人もいます。昭和期のアメリカの女性人類学者ルース・ベネディクトは、当時のアメリカ人が日本に対して偏見を抱く中、日本の美点も理解する立場を取りました。このように本書の持つ魅力は、登場人物のエピソードもさることながら、彼らがどのように日本を捉えていたかという点にあると感じます。

我々は海外の文化をどの程度理解しているのでしょうか。それ以前に自国の文化や歴史についてどれほど知っているのでしょうか。著者は登場人物の優れた見識だけでなく、偏見を含んだ見方の部分も描いています。この部分は、我々日本人が海外と向き合う上でも参考になるはず。本書を通じて我々の海外、そして自国の文化に対する考え方を見直してみたいか。いかがでしょうか。

いながき ひろゆき（司書・情報サービス課）